

20世紀初頭 女流歌人の服飾観—岡本かの子を中心に—
大久保春乃(日本女大)

〔目的〕 20世紀初頭、新詩社の機関誌『明星』誌上で活躍を開始した女流歌人の歌には、多くの服飾表現が登場する。さらに彼女たち個人の服飾観や、一般に先んじた洋装が、新聞・雑誌等を通じて紹介されることにより、当時の女性たちに啓蒙的な役割をも果たしていた。そうした歌人の一人として、前報では与謝野晶子をとりあげ、その服飾観を明らかにした。今回は、新詩社で晶子に師事し、『明星』の歌人として文壇に登場した後、晩年は小説家としても大成した岡本かの子に着目し、かの子の服飾観と、それが培われた背景を明らかにすることを目的とした。

〔方法〕 短歌、小説等の著作の他、当時の新聞・雑誌に掲載されたかの子の随筆・談話・アンケートの回答等を収集し、服飾に関する記述について検討した。さらに生前のかの子と交流のあった人々によるかの子に関する文章、および当時の写真を資料として用いた。

〔結果〕 かの子の独特の風貌や服飾の趣味は、童女風ともグロテスクとも評され、常に毀誉褒貶の渦中にあった。1889(明治22)年、かつては幕府御用商を務めた豪商であったという大地主の令嬢として生まれたかの子は、幼い頃から白塗りの化粧をされて育っており、この体験が、終生の厚化粧の源と思われる。跡見女学校時代のかの子は地味な印象を持たれているが、一平との結婚以後は、華やかな装いを好み続けた。それは人気戯画家一平の好みでもあった。太郎は大正半ばの母の洋装を「かの子流のモダニズム」と回想している。さらにかの子の晩年(1938年歿)の洋装には、1929(昭和4)年から3年間にわたった欧州滞在の影響が強い。生涯「美」を追求し続けたかの子にとって、濃厚に装うことは、自らの上に「美」を具現化することであり、自らを鼓舞し、自ら恃むところの「岡本かの子」像を演出することでもあった。